

[ブーケ]

bouquet





— SDGs 特集 —

Think Globally, Act Locally

Vol. 4

むろと廃校水族館

若月元樹

むろと廃校水族館館長
NPO法人日本ウミガメ協議会理事



“Think Globally, Act Locally”——地球規模で物事を考え、身近なところから行動を起こす——。

よりよい未来をつくっていくために、私たち一人一人にできることは何か？

この特集では、さまざまな分野の方にお話を伺いながら、そのヒントを探ります。

第4回は、NPO法人日本ウミガメ協議会でウミガメ類の保全を目的とした調査・研究に携わる傍ら、むろと廃校水族館の館長をお務めになっている若月元樹さんにご登場いただきました。



Profile | 若月元樹 (わかつき・もとき)

むろと廃校水族館館長、NPO法人日本ウミガメ協議会理事。1974年広島県生まれ。大学時代にウミガメの調査・研究に強い関心を持ち、卒業後、会社員を経て沖縄国際大学大学院に入学。修士課程修了後は、ウミガメ類の保全を目的とした調査・研究を行うNPO法人日本ウミガメ協議会に入局。2018年むろと廃校水族館館長に就任。



むろと廃校水族館

〒781-7101 高知県室戸市室戸岬町533-2
TEL: 0887-22-0815 (OH! 廃校!)

登校・下校時間

4月～9月 9:00～18:00
10月～3月 9:00～17:00
※年中無休

入館料

大人 (高校生以上) 600円
子ども (小・中学生) 300円

- ◆未就学児は無料です。
- ◆室戸市民は割引があります。
- ◆遠足・団体用プランは上記までお問い合わせください。

廃校にオープンした水族館

— むろと廃校水族館とはどのような施設ですか？

若月：その名のとおり、2006年に廃校となった元室戸市立椎名小学校を水族館に改修した施設です。2018年4月26日にオープンし、今年で4年になります。

— オープンしたきっかけを教えてください。

若月：我々は、NPO法人日本ウミガメ協議会という団体の職員です。2003年から職員が定置網漁の盛んな室戸市に常駐し、ウミガメの調査を行っています。活動を続ける中で、室戸市が廃校施設の利用者を募集していることを知り、ウミガメ調査を円滑に進めることを目的に事業へ応募したことが廃校利用のきっかけです。

— そこからどのようにして水族館へと生まれ変わったのでしょうか？

若月：当初は活動に伴っていった魚の骨やホルマリン漬けを展示公開できる博物館にすることを目指しました。しかし活動を続ける中で、ウミガメをより身近で研究したいと思うようになり、当時の室戸市長に「廃校のプールでウミガメを飼ってもよいか」と尋ねたところ、「それならば思い切って海水を引き、水族館にしようか」と提案され、廃校水族館がオープンしました。改装からオープンまでは5年を要しました。

— オープン後の反響はいかがでしたか？

若月：当初の想定を上回る来客数に、信じられない気持ちでいっぱいでした。ご近所の方も、「芸能人が来とるから、こんなに人が来とるんやろ？」と、観光客でにぎわっている状況が理解できないといった様子でした。

— 集客はあまり期待されていなかったのですね。

若月：当館に来てみてお分かりになったと思うのですが、ここは鉄道と高速道路に見放された場所にあり、オープンすることに対して批判もありました。しかし、アクセスのハードルが高いからこそ来る価値のある場所だとも思っています。誰もが簡単にに行ける場所ってつまらないですよね。



屋外プールではウミガメやハンマーヘッドシャークなど多様な海洋生物が泳ぐ



むろと廃校水族館の公式Twitterで使用されているヘッダー画像

— 公共交通機関はバスが2時間に1本のみと聞いて、たいへん驚きました。

若月：それでも、当館への道筋は国道1本なので素通りはされないんです。もともとは目的地へ行く途中に立ち寄るといって「ついで効果」を期待して造った施設ですが、うれしいことにわざわざ足を運んでくださるお客様がいます。そういった方々は近隣の施設にも寄ってくださるので、それが地域の活性化にもつながっているのかなと思っています。また、さまざまな場所で高知の県産品やお土産などを買っていただくことで、さらなる相乗効果が期待できます。

— 校外学習などで遠方から訪れる学校も多いのでしょうか？

若月：ここはびっくりするぐらい多くの学校が利用しています。今も職場体験の中学生が1人来ていますし、大学生がウミガメの研究のために日本中から集まってきます。国立室戸青少年自然の家が企画した「水族館に泊まろう！」というイベントには、20名の枠に258名の申し込みがありました。みんな廃校にはワクワクするみたいですね。修学旅行の団体が突然アポなしで来たこともあります。これほど“学校”が利用する廃校はありませんね。

— アポなしでも団体見学ができるのですね！

若月：大丈夫です。急にアポなしで来る団体のことを、私たちは「ゲリラバス」と呼んでいます(笑)。ここは近くに高速道路や鉄道がないおかげで、団体客を受け入れやすい施設になりました。旅行会社が張り切って団体客を連れて来てくださるので、経営的にはとてもありがたいことです。



休憩スペースとして開放された教室

大ヒットしたブリのぬいぐるみ

— 開館・閉館時間のことを登校・下校時間と案内したり、理科室や図書室をそのまま使ったりする、廃校を生かした運営がとてもユニークだなと思いました。

若月：当館のチケットは単語帳を模したのになっています。また、応接室に隣の廃校からいただいた校長室の椅子を置いたり、カーテンを買う費用を節約して社会の授業で使う大きな巻物の地図を掛けたりするなど、細かいところで廃校を意識した取り組みを行っています。



当時の面影をそのまま残す理科室には、小さな水槽や魚のホルマリン漬けが並ぶ

— 展示する魚はどのように手配されたのですか？

若月：近辺の漁港を通じて提供していただきました。職員が釣ってきた魚の中にはいますが、ほとんどは漁師さんからいただいた値段の付かない魚で、1匹も買っていません。通常的水族館は魚を地方、あるいは海外から調達するのですが、ここでは捕れた魚を目の前の海から軽トラックで運ぶという身の丈に合った運営を行っています。場所が場所なので、あえてどこの水族館にでもいるような魚は展示しないという方針です。

— では一定の周期で水槽の中身が入れ替わるということですね。そうするとリピーターの方も多いのではないでしょうか？

若月：はい。季節ごとに来てくださる方もいます。なぜリピーターが多いということがはっきり分かるのかというと、当館オリジナルのブリのぬいぐるみが大ヒットしたことをきっかけに、「これは家にいっぱいあるでしょう。今度はサバのぬいぐるみにしなさい！」などと話している親子をよく見かけるようになったからです。また、講演などに呼ばれた際には「ブリのぬいぐるみ持っている人〜？」と聞いて、手を挙げる子どもたちの反応を楽しませてもらっています(笑)。

— 魚のぬいぐるみはあまりなじみがないのですが、作られたきっかけは何だったのでしょうか？

若月：オープンしてすぐに、ぬいぐるみ業者が「イルカくじをやりませんか」と売り込みに来たことです。

しかし、むろと廃校水族館ではイルカを飼っていなかったで、「ブリかサバのくじならやります」と伝えたところ、5,000個買い取りを約束に作っていただけることになりました。くじは1回1,000円でいろいろなサイズが当たるといもの。魚のぬいぐるみはティディベアなどと違って男性でも買いやすく、何個買っても「大漁だぁ」みたいになって不自然ではありません。いろいろな面で受け入れやすい商品になったことが、大ヒットにつながったのだと思います。



むろと廃校水族館名物ブリのぬいぐるみ

— これらのオリジナル商品のご当地限定と伺いました。

若月：お土産をネットで買えるようになってしまうと、旅行先で買いたいものがなくなってしまふんですね。我々もしばしば「ぬいぐるみを通販してください」と言われますが、当館まで足を運んで買ってくださった方に申し訳ないので、全てお断りしています。お土産は、わざわざ現地へ行って買うことに意味があり、そこに楽しさやありがたみを感じるものです。

地域に根ざした運営

— むろと廃校水族館の魅力について教えてください。

若月：一般的水族館のように日本中、世界中から魚を集めてくるのではなく、室戸に生息する生き物の展示に特化した、身の丈に合った運営をしているところだと思います。他所から来た人は室戸のものが見たいんですよね。例えば、大英博物館やルーブル美術館に日本画ばかりが飾ってあったら、日本人はわざわざ見に行かないと思います。



タッチプールにリニューアルされた手洗い場

— その土地でしか見られないものを展示することに意味があるのですね。

若月：ボラは人々にバカにされがちな魚ですが、ここではこのボラの展示がお客様の心をひき付けています。海には「聞いたことはあるけどよく知らない」「ちゃんと見るとかわいい」という生き物がたくさんいます。他の水族館だと小さい水槽に入れられている魚が、ここでは大きい水槽を与えられてVIP待遇を受けている。それ自体が珍しいことですし、他の水族館では脇役の生き物をしっかり見てもらいたいという考えから、いわゆる主役の生き物は展示しないようにしています。



若月館長に群がるボラ

— 確かに有名な水族館に足を運ぶと、メインの水槽を見ただけで満足してしまうことがあるように感じます。

若月：私は館長といっても水族館に勤めたことがないので、専門的な知識がない分、自分のしたいことに対して純粋に取り組むことができます。おそらく普通の水族館ならばオープン前にいくつかオリジナルの商品を用意すると思うのですが、ここはオープン後に多数の要望があり、それに応えてぬいぐるみを作ったという感じです。ホームページやチラシに至っては、いまだに作ったことがありません。

— あまり広報活動をされていないにもかかわらず、こうしてお客様が多数いらっしゃるようになった理由をどのようにお考えでしょうか？

若月：プレスリリースを出さないことだと思います。こちらが積極的に情報を発信しない分、テレビやインターネットの情報をみて興味をもったお客様が、さまざまな場所から足を運んでくださる。そういうことの積み重ねだと思います。加えて、おそらくみんな田舎が好きなんです。テレビの視聴率ランキングを見ると、地方や田舎を扱った番組が群を抜いて視聴率を得ています。この「田舎」がポイントなんです。これ以上、田舎を衰退させてしまうとっっぱ返しを食うのは都心部なんですよね。室戸市にもともとあった小学校16校のうち、現在11校が廃校になっています。これはかなり深刻なことです。それをみんな分かっているのだから、そろそろ都会と田舎の価値観が逆転するのではないかと考えています。



入口上に作られたツバメの巣。天敵から身を守るため人気のない場所に巣を作らないツバメが、水族館として生まれ変わった元椎名小学校に戻ってくるようになったという

SDGsと子どもたちの未来を考える

— 最近では地方の過疎化や少子化といった話題もよく耳にします。その中で若月館長は、SDGsという言葉をもどどのように捉えていらっしゃいますか？

若月：SDGsは田舎でとくに実現されているもので、単なる流行語だと思っています。「環境ホルモン」や「ダイオキシン」など、あれだけ騒がれていたものが今ではすっかり忘れられていて、SDGsもそうになってしまうのではないかと心配しています。結局のところSDGsとは、田舎の人たちが実践している身の丈に合った暮らしのことだと思うんです。

— 具体的にはどのようなことでしょうか？

若月：例えば、室戸には昔「浜弁当」という習慣がありました。親が仕事から帰ってきたら、お弁当を作って子どもたちといっしょに海へ行くんです。西日の当たる暑い家の中ではご飯が食べられないので、夕方の涼しい時間帯に子どもたちを海で泳がせて、おながすいたらそこでお弁当を食べて帰るということをして、近所の人たちと声を掛け合っていました。疲れて家に帰ってきたら、子どもたちはもうお風呂に入って寝るだけ。これはすごく理にかなっていることだと思います。海では離岸流が発生するので大人がいればしっかりと子どもを監視できるし、ご近所と声を掛け合うことによって地域の交流も生まれる。その中で磨かれる感性はやっぱり違うと思うんです。教科書で理解することと本能的に感じながら理解し育っていくことは全くの別物で、田舎にはそれを学ぶ機会があると感じています。

— 最近では海洋汚染なども深刻な問題になっています。

若月：人は古くから海にゴミを捨ててきました。いらぬものを海に捨て、必要なものを海から得るといって生活をする中で、今何が問題になっているのかというと、分解されないものが増えてきていることです。私は不自然な生き方の過ぎた結果が、現代の環境問題につながっていると思っています。例えば、朝早く起きて夜早く寝れば、さほど電力なんて必要ないわけなんです。自然に順応した生活が最も環境に優しいのだと考えています。



オサガメの腸から出てきたレジ袋の展示

— 最後に、若い方へ向けて伝えたい思いがありましたらお願いします。

若月：卒業論文のテーマを自分でしっかりと決められる人になってほしいと思います。やりたいことをやれないのではなく、やりたいことが見つからないという若者の現状に、私は危機感を抱いています。そのためには幼い頃から新聞を読むことなどが有効ですが、今は新聞を取らないご家庭も散見されます。中身や重みのないネットの情報ばかりに慣れ、知識を身に付けたつもりになってしまうのはとても危険なことです。

— 自分の考えをしっかりとつことが大切なのですね。

若月：新聞には文庫本1冊分くらいの文字量があり、毎日最新の情報をアップデートできます。本や新聞をじっくり読むことはとても大事なことです。また、小学生や中学生から「私は将来に向けて何をしたらいいですか?」と聞かれることがよくあります。その際、私は「特別なことをしなくていいから、教科書をしっかりと勉強すること」を伝えています。日本では全ての子どもに平等な教育を受ける機会が与えられています。義務教育を通して知見を広め、きちんと世の中に目を向けることが必要なのだと思います。



元室戸市立椎名小学校校歌の石碑がラッピングされた自動販売機。職員からは「校歌コーラ」の愛称で親しまれている

SDGs とは？

Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)の頭文字を取ったもの。2030年までに貧困や飢餓、福祉、教育、エネルギー、気候変動、平和的社会等の課題に対して解決策を見だし、持続可能でよりよい世界を目指すための国際目標です。国連サミットで決められた17のゴール・169のターゲットで構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



上野耕平の
 © I r © S S i n g j [クロッシング]

第14回

四季島を見送る



JR東日本が誇るクルーズトレイン四季島。上野駅発着で、風光明媚な各地を巡る贅沢な旅ができる列車だ。乗車人数も限られており、かなり競争率が高い。その四季島の出発式に参加させていただく機会を得た！

当日は上野駅長さんと一緒にホームへ。たくさんの方と一緒に並んでいる。この時のために上野駅へ集まるそう。ありがたいことに先頭車両のところまで鐘を鳴らす役目をいただいた。

ゆっくり出発する四季島。乗車するお客様の笑顔の素敵なこと……。そして一同で精一杯見送るその様は、なかなか他では見ることのできない光景であった。いつか乗りたいな……。

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第1位・特別大賞(史上最年少)。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクール第2位。17年度第28回出光音楽賞、18年第9回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。NHK-FM「×(かける)クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「情熱大陸」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

◇上野耕平コンサート情報はこちら。
<https://uenokohei.com/concert/>
 (上野耕平オフィシャルホームページより)



編集部メモ

トランススイート
 JR東日本の運行する「TRAIN SUITE 四季島」は、ツアー専用の周遊型寝台列車。各地に途中下車して、観光を楽しめるのが特徴である。定員わずか34名の10両編成で、車両は客室スイート車6両の他に、先頭と最後尾の展望車両「VIEW TERRACE きざし・いぶき」(1・10号車)、ラウンジカー「LOUNGE こもれび」(5号車)、ダイニングカー「DINING しきしま」(6号車)がある。東日本各地の工芸品が調度に取り入れられており、広々としたぜいたくな造りになっている。2022年5月1日に、運行開始5周年を迎えた。



※地図は現在募集中の1泊2日コース(山梨/長野)と、3泊4日コースの路線より(2022年10月時点)。

多様な子どもたちを音楽でつなぐ ホワイトハンドコーラス NIPPON

= 特別レポート =



ホワイトハンドコーラスNIPPON京都公演 (2022年9月23日・京都コンサートホール) ©Mariko Tagashira

「ホワイトハンドコーラスNIPPON」は、目の見えない子と耳の聞こえない子も一緒に活動する合唱隊です。小学生から高校生まで、みんなで毎週音楽に取り組みます。今号は、活動の練習風景のレポートと、同団体の芸術監督であるコロネりかさんのインタビュー記事をお届けします。



©Mariko Tagashira

ホワイトハンドコーラスNIPPON

1995年に「エルシステマ」の本拠地ベネズエラで誕生したインクルーシブな芸術活動を行う合唱隊。聞こえない子も、見えない子も、車椅子の子も、その友達も、多様な子どもたちが互いの力を合わせて表現します。手の表現で歌う(手歌)サイン隊と、合唱で歌う声隊で構成されており、音楽を「聞くこと」「見ること」ができる活動を行っています。

芸術監督 コロネりか

ベネズエラ生まれのソプラノ歌手。2017年より東京ホワイトハンドコーラス(現ホワイトハンドコーラスNIPPON)の芸術監督を務める。駐日ベネズエラ大使夫人。聖心女子大学・大学院で教育学を学んだ後、英国王立音楽院を優秀賞で卒業。同年ウィグモアホールでデビュー。モーツァルト・フェスティバル(ブリュッセル)、宗教音楽祭(フィレンツェ)、日英国交150年記念メサイア(ロンドン)でソリストを務めるなど、オラトリオの分野に力を注ぐ。2019年東京国際声楽コンクールでグランプリ・歌曲の両部門で優勝。キングレコードよりCD『BRIDGE』を発売中。

ホワイトハンド
コーラスNIPPONの
練習風景の一部を
ご覧いただけます。





声隊の練習



サイン隊の練習

見ることができる音楽

ベネズエラで誕生したホワイトハンドコーラスは、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由などの障害のある子どもたちと、健常者の子どもたちが芸術活動を行っています。子どもたちは、手の表現で歌う「サイン隊」か、合唱で歌う「声隊」どちらかのパートを担当し、曲を表現します。音楽に合わせてサイン隊の白い手袋が舞うことから、ホワイトハンドコーラスと呼ばれています。

「ホワイトハンドコーラスNIPPON」は、日本においては2017年にスタートしました。2020年からは、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場との共催事業として、東京と京都において活動を行っています。

*

明るい夏の日曜日の午後、ホワイトハンドコーラスNIPPONの拠点である東京芸術劇場を訪ねました。芸術監督のコロナえりかさんや、ピアニストの千葉直美さん、スタッフの方が協力して準備をし、集まった子どもたちと、もう一つの拠点である京都の子どもたち、そして練習場所に足を運ぶことが難しい子どもたちを、タブレットを用いてオンラインでつなぎ活動が始まります。

オンラインによる練習は、さまざまな子どもたち全員が不自由なく参加できるよう、コロナ禍になる前から取り入れていたということです。この日は入院中のメンバーも病院から参加して、9月に控えた京都公演の曲目を、声隊とサイン隊がそれぞれ90分ずつ練習しました。



発声の指導

子どもたちによる「手歌」

前半は合唱を行う声隊の練習です。メンバーの子どもたちの名前を歌詞にした発声練習のあとに、『コンコーネ50番』の中から練習曲を歌います。

コンサートで披露する童声(女声)合唱組曲『あめつちのうた』(作詞:林望/作曲:上田真樹)には、歌詞の意味や音楽の表現を大切にしながらじっくりと取り組み、英語の曲『リメンバー・ミー』は、細かい発音練習のあとに、一文一文歌って確認します。

最後の『にじふらい』は、ホワイトハンドコーラスNIPPONのために書かれた楽しい曲です。子どもたちのつくった手歌を見て、作曲家の上田真樹さんが書き下ろしてくださいました。練習では、曲の「好きなものはずっと好き」という箇所について、表現を模索しました。

*

後半のサイン隊の練習には、手話通訳・手話パフォーマーのコンビ「ケーマトーマ」のトーマさんも加わり、手話の五十音の確認をしました。高校教員でもあるトーマさんは、聴覚障害のある子どもたちのために手話通訳を行い、コロナさんも自分の言葉は手話で子どもたちに伝えていました。

ホワイトハンドコーラスの行う手歌は、手話を交えながら歌詞のイメージを表現するパフォーマンスであり、サイン隊の子どもたちは相談しながら、時間をかけてその曲の手歌をつくっていきます。『にじふらい』の手歌についても細かくその表現を検討し、みんなで1つのフレーズに対して何度も納得のいくまで練習を繰り返していました。

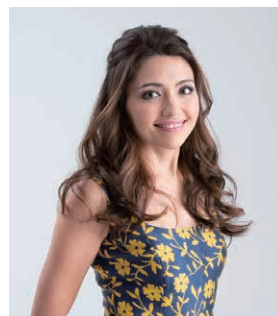
小学生から高校生まで、多様な子どもたちが同じ曲を共有して楽しむ姿はたいへん印象的で、音楽は人と人をつなぐことができるのだと、あらためて実感しました。

ブーケ編集部

次のページでは、
芸術監督のコロナえりかさんの
インタビュー記事をお届けします。

Interview

コロネりか



©King Records

芸術監督を務めるコロネりかさんは、ホワイトハンドコーラス NIPPONの拠点をもつ東京と京都を行き来し、指導を行っています。秋の京都公演を控えたコロネさんに東京都内でお話を伺いました。

全ての子どもたちと音楽を

— 夏に見学させていただいた練習では、さまざまな子どもたちが一緒に音楽を楽しんでいる姿が印象的でした。メンバーの人数や障害をもつ子の割合はどのぐらいなのですか？

声隊は15人ぐらいで、そのうち視覚障害のメンバーが弱視を含めて4人です。サイン隊は20人ぐらいで、聞こえない子は6割ぐらいでしょうか。お休み中やオンライン参加の子もいます。

— メンバーが入院している病院と中継されていますね。

今は無事に退院しました。京都公演も参加します。ただし、難病で進行性のある病気なので、闘病生活を送りながら練習に来てれています。彼女は高校生のときまで健康で、合唱をしていましたが、急に発症して車椅子の生活になったことをきっかけに、「できないことや人に頼ることも増えるけれど、自分にも誰かのためにできることがあるはず」と希望をもって積極的に参加してくれています。

— この活動が彼女の目標になっているのですね。コロネさんがホワイトハンドコーラスNIPPONの活動を始めたきっかけは何ですか？

私は大学で音楽を学んでおり、耳の聞こえない方たちがどのように音楽に触れているのだろうかと考えていました。そのような中、教員免許を取得するために行った、ろう学校での体験が大きなきっかけとなりました。

— どのような体験だったのですか？

初日に簡単な手話で挨拶と自己紹介を終えると、子どもたちに「好きなことは何ですか？」と聞かれました。私は何も考えずに「歌うことが好きです」と伝えると、子どもたちは「じゃあ、歌って！」と。耳が聞こえない子に向かって歌うことに戸惑いを感じましたが、自分なりに精いっぱい歌うと、子どもたちは一生懸命見て聴いてくれたんです。聞こえない子も一緒に音楽を楽しむことができるのだと直感し、その体験によってさまざまな子どもたちと音楽を奏でたいと思いました。

アイデンティティーに寄り添うこと

— ホワイトハンドコーラスの活動を始めてみて、苦労されたことはありますか？

たくさんあります。まず、ろう者との関わり方が課題でした。ろう者の保護者の方に教えていただいたのですが、ろう者にとって「聞こえる人」は、外国人、あるいはそれよりも遠い存在です。聞こえる人が「音楽はこうだよ」と言っても、相手には響きません。「それはそっちの世界のことでしょ」という反応が返ってきてしまうのです。

— そのような壁があるのですね。

ただ私たちが恵まれていたのは、ろう者の井崎哲也さんが協力してくださったことです。井崎さんは、日本ろう者劇団を立ち上げ、演出家・俳優として活動する、この世界ではレジェンドと呼ばれる方です。子どもたちの意見を聞き取って、ろう者の目線で考えながら活動に協力してくださっています。



インタビューの翌週に行われた京都公演
©Mariko Tagashira (3点とも)



お客さんの歓声がひとさわ目立った『だれにだってお誕生日』

— 子どもたちも安心して楽しく活動できますね。指導していて大変なことはありませんか？

始めた頃は、小学校1年生から高校3年生まで一緒に活動するので、歌詞の意味を、それぞれの年齢層に分かるように届けるにはどう伝えたらよいか悩みました。でも今では、子どもたちがお互いに教えたり考えたりして、サポートし合う体制になっています。

— 子どもたちはお互いによく意見を出して聞き合っていましたね。

コミュニケーションも最初は困難でした。目の見えない子どもたちと、耳の聞こえない子どもたちは、お互いに興味があるようで、自然とコミュニケーションをとってくれます。しかし、ろう者どうしでは、通常の学級に通っている子どもたち、口話（口を読むこと）で育っている難聴の子どもたち、手話で学校に通って勉強をしている子どもたち、それぞれの間の溝がものすごく大きかったです。ろう者のさまざまなアイデンティティーに寄り添っていくことが課題でした。今では子どもたちの仲はよく、練習の休憩時間や公演の際の移動中など、楽しく過ごしているようです。

世界への発信を目指して

— これまでの活動で、印象的だったエピソードはありますか？

特に記憶に残っているのは、難聴の女の子の恋の話です。とても恥ずかしがり屋で、自分のことを人に伝えることが苦手な子でした。そんなあるとき、ベネズエラからコンサートのために来日したホワイト



公演前の様子

ハンドコーラスのグループの男の子に、彼女が一目ぼれをしたんです。彼女はコンサートが終わると、お母さんに本屋さんでCD付きのスペイン語の本を買ってもらい、毎日CDをかけて、スピーカーを手で触り響きを感じ取りながら、ノートにぎっしりと書いて勉強したそうです。翌年に同じグループがベネズエラから来日したところ、完璧なスペイン語で書いたラブレターを男の子に渡しました。その頃から彼女はいろいろなことに挑戦するようになりました。沖縄公演の際に、事前に現地のエイサーのグループに連絡をとって、演奏を聴かせていただく機会を設定したこともあります。

— うれしい変化ですね。コロンさんはこの活動でどのようなことを大切にされていらっしゃるのでしょうか？

私たちの活動は、音楽の分かる人、手話の専門家など、さまざまな役割をこなす大人がいないと成り立ちません。保護者の方も巻き込むようにしていますし、教育面では学習院大学の嶋田由美先生にも協力いただいています。日本は2014年に障害者権利条約を批准しましたが、2022年9月、国連からインクルーシブ教育の権利を保障するよう勧告があったとニュースになりました。インクルーシブ教育とは、障害のある子もいない子も、その他の多様な子も、みんなが同じ場で学ぶことができる環境を目指すものです。私たちの活動が、少しでも子どもたちのその権利を守る場所になれたらいいなと思っています。そのため、こうしてお話を聞いていただくなど、より多くの人々を巻き込んでいきたいと考えています。

— 今後の展望を教えてください。

大きな目標として、2024年はベートーヴェン『第九』の初演から200年を迎える年なので、ドイツで『第九』を演奏したいですし、5年以内にはカーネギーホールへ行きたいと考えています。今後ホワイトハンドコーラスNIPPONは沖縄にも拠点ができますので、東京、京都、沖縄でネットワークをつくり、保護者どうしも関わりながら、子どもたちの活躍する未来のためにコミュニティを広げていくことが目標です。

One day, [ワンデー ワンモーメント] one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ

Photo・Text：Tomoko Hidaki

16 枚目

江戸の旅人

初めて訪れた熊野古道は雨。登山靴だけでは滑るからと土地の人に教えられ、お店で買った縄を巻き付けて滑り止めにした。染み渡るような静寂の中、湿度を含んだ土と森林の匂いが全身を包み、縄を巻いた登山靴が小石を踏み締めるザク、ザクという音だけが響く。まるで色加工したようなこの山道は実際、加工せずにこの色合いのままなのが驚きだった。しばらくすると分かれ道に出る。江戸道と

明治道と記されている。どちらを選ぼうかと思渡せば、古い方がはるかに急で最短距離。昔の人はわざわざこの急坂を急いだのだろうか。ふと今、江戸の旅人とすれ違っても不思議ではないような気がした。そして私はゆっくりと、回り道をする新しい方の道を、歩いていくことにした。



ヒダキトモコ

フォトグラファー。日本写真家協会(JPS)、日本舞台写真家協会(JSPS)会員。米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。人物写真とステージフォトを中心に撮影。ジャケット写真、雑誌の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャル・フォトグラファー。官公庁や経済界の撮影も多数。
<https://hidaki.weebly.com> Instagram:tomokohidaki_1,2,3



Contents

- 04 [連載] SDGs 特集 Think Globally, Act Locally Vol.4 若月元樹(むろと廃校水族館 館長)
- 09 [連載] crossing 第14回 上野耕平
- 10 [特別レポート] 多様な子どもたちを音楽でつなぐ〜ホワイトハンドコーラス NIPPON コロンえりか
- 14 [連載] フォトエッセイ One day, one moment 16 枚目 ヒダキトモコ

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.16をご清覧いただき、ありがとうございます。
今号は、高知県室戸市のむろと廃校水族館からインタビューをお届けします。
廃校の雰囲気とともに、室戸に生息する
多様な海洋生物の展示を楽しむことのできるユニークな水族館では、
登校されたお客様の童心に返ったかのような表情がたいへん印象的でした。
ホワイトハンドコーラスNIPPONは、さまざまな年齢の聞こえない子や見えない子、
健常者の子どもたちが集まって、みんな一緒に活動しています。
時には意見を交わしながら、真剣に楽しく音楽をつくり上げる
子どもたちの姿に、わくわくしながら取材しました。
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、
心より厚く御礼申し上げます。

staff

Art Direction & Design(表紙・本文): 中澤美羽

DTP: 清新社 / 印刷: 新日本印刷

製本: ヤマナカ製本

No. 16

<https://www.kyogei.co.jp/>